少女甲　……どうして小父さん！

老爺　俺の胸には光が消えて終つたのだ。そして俺はこれから先暗い〳〵闇の夜を、一人で行かなければならないのだ。

いや、ほんとうに行かなければならないのだ。娘さんたち、俺にかまつてくださるな。

少女丙　小父さんのおつしやることはよくわからないけれど、何んだか私悲しい心持がするわ。

少女乙　……ほんとに私も。

老爺　……いや〳〵、さうだらう〳〵。俺も悲しい。だが行かなければならない。

（其所につないである小舟をさして）

この小舟に乗せて俺をやつてください。

少女甲　小父さんのおつしやることはよくはわからないけれど、どうしてそんなお考をお出しになつたの小父さん。

少女乙　なぜ私たちにはわからないのでせう。私たちは小父さんの一番仲よしなのに。

老爺　それは無理のないことだ。けれどもそれがいゝのだ。物ごとゝいふものは解つてしまへば皆悲しいことばかりなのだ。

少女丙　でも少し位はお話してくだすつてもいゝでせう。

老爺　ハハハ……ではその少し位だけを話しませう。さうしたなら、何故俺が、長い三十五年も住みなれたこの緑ケ島を見捨てゝ、人知れず遠いところへ行つて終ふのか解つてもらへるかも知れない。さうして俺の話をきいたら、皆の人達へ告げてくれるのだよ。

數名　……えゝ。

老爺（空の方を見ながら）――あゝ岸邊にうちあげる波は、日毎夜毎往つてはまた歸つてくるものを。何故年月といふものは、一度去つては二度とめぐつては來ないのだらう？……ふりかへつてみれば、ながアい三十五年のその間、鷗が磯に來て鳴かない日はあつても、この緣ケ島の燈臺に、一夜として燈火のつかない夜はなかつた……沖を通る大船小舟は、みなこの燈火を目標に長い航路の往來を過ぎたものだ。泡立つ波に隱れてゐる暗礁をさけて、無事に通つて往つたものだ……けれども俺は見た。おそろしいものを見たのだ。

少女達　……何を小父さん。

老爺　三十五年の間に、何百何千度と通つた船の中で、恐ろしい暗礁に乘りあげてこわれた船を三度見たのだ。その中には澤山な船客が乘つてゐたそしてその中には親や兄弟、友達さういふ人たちが乘つてゐたのだ。娘さんたち、それをおもつて見るがいゝ。俺は今大層年齡をとつた。あなた方には考へられないことが考

へられるやうになつたのだ。それで此頃になつて毎日彼の昔この沖で沈んだ船の乘合人のことを思ひ出すようになつた。そしてそのことを考へれば考へるほどこの島にゐられない心持がして來たのだ。

少女達　私たちにはよくわからないわ。

老爺　……それでいゝのだ。それでいゝのだ。

今に何もかもよくわかる時がくる。……さうだ、島の人達に見付からないうち、俺は早く行かなければならない。

少女達　どうしても小父さんは行つて終ふの？

老爺　名殘りは惜しいが娘さんたち。

少女達　……小父さん。

（この間に綱をほどいて小舟に乘り込み、靜かに波の上を漕ぎながら、うしろをふりかへり〳〵）

老爺　さようなら娘さん達。

少女達　（默つてその姿の波の遠くへ消えてゆくのを見送る）

……小父さん……（唯靜かに波の音ばかりきこえる）

詩劇　隱れたる王者

（この劇は氣分を一番大事にすること。聲のリヅムを氣をつけて扮裝さえちがへれば三人の少女で演出することは容易である。）

深山の森。そこに小舍のやうな家が、たつた一軒ある。人などは決して尋ねて來るやうなところではない。

「誰がこのやうに寂しいところに住んでゐるのか？」

小舍の中には、二人の人影が見える。そして何事かを話してゐるやうである。一人は、六十位に見える崇高い人、胸のあたりまで波打つてゐる白く長い顎髯と、澄みとほつた眼を見れば、誰でもその人が、王者であつた日のことを、直ちに感ずるであらう。また、も一人の四十近い、たくましい姿の男は、曾ての日に、王の身邊に侍して或は戰鬪の日の曙に、或は王城の夕の月を王と共に高樓から眺めた時にそ

の何時でもの日を共に忠義深く送つて來た近臣であることも、同じやうに、すぐ解ることである。

山はだん〳〵夕ぐれて來る。舞臺はうすぐらく、小舍の中に蠟燭の光ゆらめく。

歌　あゝ日は遠し
　　おもひやる彼方。
　　曙の空と海
　　黃金に映ゆる夕の城。
　　宴の歡歌も
　　凱旋も
　　消えて今はただ
　　遠き日の
　　淺霧の中に

　　薄みける。
　　あゝ日は遠し
　　おもひやる彼方。

（この歌幕あくとき靜かなメロデーにてきこゑる）

臣。王樣。今日もまた夕暮時となりました。あれごらん遊ばせ。夕陽は彼のやうに赤く山々を染めました。（間）あゝきこゑるものは、寂しい木の葉のそよぎばかりでございます。

王。ウム……。（間）寂しいのウ。何んといふ長い歳月が經つて往つて終つたことであらう。

臣。東から昇る太陽が西に沈むのを幾百度眺めくらしたことでございませう。

王。おゝさうだ、私たち二人を訪ねるものは、森の獸共と、夜毎の月ばかりぢや。

……（急に思ひ出したやうに）彼の栗鼠は今日は未だ一度も來なかつたか。胡桃をやることを忘れまいぞ。

臣。今朝もまた鹿が、前脚を傷めて參りました。私はその傷口を卷く布を捜すために長い間かゝつたのでございます。

王。ウム……可哀さうに。この間もそのやうなことがあつたな。狐が耳を切られて來たといふやうなことが……獸たちは里近くへ出てゆくと見えるな。

臣。ハイ。この奥山へ王樣と私とが身を隱棲ましてから、もう十年にもなりませう。その間、一度も獸たちが傷いて來るやうなことはございませんしでしたのに。

王。（恐れるものゝやうに）して見るとこの奥山まで、俺達二人を捜しに來たものがあるのではないか。

臣。と申しますと？

王。（悲憤の表情にかはり、身を震はせて）彼の憎むべき一族の者だ！俺の王位と

國とを奪つた一族の者だ！おゝ!!!憎むべき……。

臣。王樣。王樣。（なだめ、慰さめるやうに）どうぞもう昔のことはお思ひなさいませぬやうに。それはお身のためによろしいことではございませぬ。

王。（寂しい微笑をうかべ）おゝさうだ。何もかも過ぎたことだ。何もいふまい。（急に氣を持變へて）栗鼠はまだ歸つては來ないか？

臣。ハイ。先程からあゝして窓のところへ來て居ります。（王樣を慰めることに勢を得て愉快さうに）彼の可愛い、丸い眼をごらん遊ばせ。王樣。

王。ハ……（淋しさうに）來た。來た。可愛奴だ。

二幕に移つてゆく間に、夕暗次第に濃くなつてゆき、最早全くの夜となる。月光、青く、蒼く梢を透して窓から射す。

臣。あゝ夜になりました。今宵の月は、また何んといふ美しさでございませう。

王。青く、美しく澄んだ月だのウ。研ぎ澄した銀の面のやうな月だのウ。……

……（しばらく間）

王。鳥たちは皆その塒へ歸つて往つて終つた。獸どもは洞や岩影へ姿を隱した。

臣。靜かな、靜かな夕べでございます。微風さへもございません。唯遠くにきこえるのは梟の夜を歎ぶ聲ばかりでございます。（長い間）

臣。（フト何か物の音をきゝつけたる樣子）何か戸口を打つやうな……

王。また獸が傷いて來たのではないか？

臣。（戸口の所に走り行き、そこから覗いて見て、驚いて王の側へひきかへし）

おゝ！誰か來たやうでございます。

王。（じつと戸口の方に眼をやり、恐るやうに）誰が來たと？

臣。（再び戸口に走り行き）何者であるか？

（そこへ來たのは十四位の美しい少女）

少女。道に迷ふた者でございます。どうぞ此所をお開けくださいませ。

臣。道に迷ふたもの？（小時考へて）しばらくお待ちあれ。

臣。（王の側へひきかへし）王樣。道に迷ふたと言ふて可愛い小娘が戸口に立つて居るのでございます。

王。（や、安心したやうな顏をして）小娘では恐るべき者ではないらしい。此所へ通して見よ。

臣。（戸口へ走り行き戸を開きながら）では中へ……

（美しい少女が、だんだん王の前へ近づくにつれ、王の顏と、少女の顏とに不思議な表情があらはれて來る。それを見まもつてゐる臣の樣子も急に非常な愕きに變る。

それは十年の昔、王位を奪はれた夜月光を踏んでたゞ一人の近臣を從へて城を逃れ出た時に、王城の奥深い一室の搖籃に眠つてゐた嬰兒が、即ち今

此所に見る少女。王の一日として忘れることの出來ない最愛の王女であつたからである。

（靜かに幕――幕おりて、この揚面の氣分のすゝんでゆく間を、梟の鳴く音を入れる。）

ホロッ、ホウ、ホロッホウ
ホロッホッホウ
ホロッホウ
ホッホウ
ホッホウ

（淋しい氣分を與へるのがこの劇のいちばんの目的であります。青い夢が靜かな波の上を流れ過ぎてゆくやうな氣分とでも申しませうか。）（をはり）

少年對話　あやまち

子　お父さん、今夜もまた何か面白いお話をしてくださいな。

父　さうさねえ。お父さんはお伽噺の先生ではないから、そんなに澤山面白いお話は知らないが、ちやア、今夜は一つお父さんが、恰度おまへ位の時に爲た幾つもの惡戲の中で、今でも忘れずに覺えてゐるのを話してあげようかね。

子　えゝ、どうぞお父さん！　だけどお父さんもやつぱり僕たちのやうに惡戲なんかなすつたのですか。

父　ハハハハ。さうさお父さんだつてやつぱり子供の時分には、隨分惡戲をしたものさ。

子　今は何故惡戲をなさらないの？

父　もう惡戲をして見たいとも思はないからさ。

子　大人になると誰でも柔和しくなるの。

父　さう。おまへの思ふ通りだ。大人になると誰でも柔和しくなるものさ。だから

オトナといふのだよ。ハハハハ。

―あ　子　いやだアお父さん…。そしてお父さんはどんな惡戯をなすつたの？

父　澤山で今ちよつと思ひ出せない位だね。その中で鷲を殺したことだけはよく覺

や　えてゐるね。

ま　子　エッ！　お父さんが、鷲を殺したのですつて？

ち　父　何もそんなに驚くことはないよ。それは私が恰度おまへ位の時分のことだ。私

―の通つてゐた學校は、町から一里半ほど離れた所の柏ケ原といふ原つばの眞中に建

つてゐたのさ。そして生徒達は、皆な町からテク〳〵歩いて其處で通つたものだ。

子　何故電車に乘らなかつたの？

父　その時分には電車などといふものは聞いたこともなかつた。雨が降つても、風が

吹いても小さい兵隊さんのやうな恰好をして、生徒達は、その長い一本道をゾロゾ

ロ並んで行つたものだ。それでその學校の周圍は、一面の綠の原で（こゝでお父さ

んは、さも〳〵あの時は樂しかつたといふ風で）春になると君影草やクローバーが

―あ　咲き亂れる……青い空のその高い、深いところでは雲雀が歌ふ……ずうつと彼方のト

ま　ラピストの尼寺からは、やはらかい夢を襲ふやうに鐘の音が響いて來る……遠くの牧

ま　場からは、けだるさうに牛の啼くのがきこえてくる……學校の裏の小さな湖水にはゲ

ち　ンゴラウ蟲や、タイコウや、メダカがすい〳〵泳ぎ廻る……巢立ちしたばかりの鶺鴒

―は、母鳥と一緒になつて、あぶなつかしい飛び方をしながら、野の風を切つてゆく

……ほんたうにいゝところだつたよ。

子　何んだか外國のやうね。

父　それから、また彼方の連山には……

子　もう景色のことは澤山ですから、早くその鷲を殺した話をしてくださいな。

父　ウム……その話か。それに冬の日のことだつた。毎日降りつゞいてゐた雪はその日になつてパッタリやんでしまつた。その日は學校も恰度お晝きりだつたので、私達仲のいい三人の腕白連、一人は松井と云ふのと、もう一人は大川といふ子供だつたこの三人は學校の歸り途を、すぐ家へ歸ればよかつたのに、今日はお天氣がいゝから兎をつかまへに行かうといふので、原つばのずうつと彼方の牧場の方へ出かけたのさ。

ま　子　そんなに廣い原なんですか。

ち　父　廣いとも、廣いとも、果の見えない位の原つばさ。おまへも知つてゐる通り、北國の兎は冬になると毛色が白くなるので、雪の上ではちよつとわからないのさ。まして三人共何んの用意もしてないのだもの、たとひ兎を見つけたところで捕まへられるものではないのさ。それでも三人は一生懸命捜し廻つた揚句、とう〳〵牧場の建物の裏のところまでやつて行つたのだ。その建物の周圍は、黒板塀で取圍まれてあるので、中へは無暗に入ることは出來ない。そこで三人は、グルッと其處を一廻して、裏木戸のところまでやつてくると、その木戸の傍に、私達三人が未だ見たことのない大きな鳥が一羽、黄色い目玉をグリグリさせて、此方を睨みつけてゐたのだ。

あ　子　お父さんそれが鷲だつたのですか？

や　父　さう。その鳥が鷲だつたのさ。羽をひろげたところは一間もあるやうに見えたね。

ま　子　それからどうなすつたの？

ち　父　それから、

「やア此奴は何んて鳥だい？」。

「鷲の親玉だらう」。

「いやこれは乾度鷲だらう」。

『生捕にしてやらうか』。

『それがいゝ。生捕！　生捕！』

『やれッ！やれッ！』

『やつつけろ!!!』

そんなことを言ひ合つて三人は、早速大鷲生捕の準備にとりかゝつたのさ。

子　鷲は逃げませんでしたか。

父　逃げるどころか、大きな口をバックリとあけて、爪をいからして私達へ飛びかゝつて來たのさ。敵はたつた一人―ではない一羽。こちらは三人だ、負けるものかと、右に逃げ、左に避けて、その首つたまを壓へつけようとして奮戰したけれども何しろ敵は爪や嘴といふ恐ろしい武器を有つてゐるので、なか〳〵取つ組むわけにゆかない。

『撲りつけろ！』

と一人が云ふと、それッと三人は其邊にあつた石ころや棒切を拾つて、滅茶々〳〵にぶつつけたのさ、さうすると鷲は益々怒り出して、飛びついてくる。

『そをれ！　ストライク、ワン！』

びゆつと飛んで行く石ころが、ポカンと鷲の胸元へ當つたかと思ふと、どつこい鷲は大きな爪でバチッとうけとめる。

『キャッチうまいぞ、も一つお見舞申す。』

びゆつびゆつと飛んでゆく石ころや雪玉を鷲は美事に嘴や羽で跳ねとばしてしまふ。

私たちは汗だらけになつて奮戰したが、なかなか敵が強いので生捕ることが出來ない。もうかうなつたら仕方がないと、一番力の強い大川が、其所にあつた太い丸太棒を持ちあげて、ポカリ〳〵と五六ぺん鷲の頭を撲つけた。それで流石の大鷲もあはれや勇士の最期を遂げて、グッタリとなつてしまつた。

子　あゝよかつた。それから、どうなすつたの？

父　それから三人は凱歌を擧げて、その大鷲をひきずつて、どん〳〵町をさして引揚げようとすると、おどろいた。突然、その塀の中から、

一　「鷲を苛酷るのは誰だ？

あ　と云つて怒鳴つたものがあつたのだ。

や　子　ではその鷲は飼つてあつたのですね。

ま　父　野生の鳥かと思つて、こんなことをしてしまつたのは、とんでもないあやまちだつたと、三人共顏色を變へたが最早間に合はない。

ち　子　そしてお父さん達は其所であやまりましたか。

一　父　おまへのいふ通り其處で直ぐあやまればよかつたのだけれど、何しろ突然牧場の男に怒鳴りつけられたので、喫驚したのと、もう一つには、誰でもあることで自分が非常に惡いことしたといふことを感ずれば感ずるほど、其處にじつとしてはゐられなくなるもので、その聲をきくと三人は逃げ出したのさ。

子　殺した鷲は？

父　勿論そこへはふり出して。

一　子　それから如何なりました？

あ　父　詳しいことは忘れてしまつたが、其の翌日、受持の先生と一緒にあやまりに行つた。

や　子　牧場の主人は怒りましたか？

ま　父　いゝや、その主人は少しも怒りはしなかつた。何んでもこんなことを言つたことを覺えてゐる。

ち　「えゝ彼の鷲は、九年も前から飼つてありますので、殆んど自分の子供のやうに思つて居りました。然しあゝいふ猛鳥を、放し飼にして置きましたのが私の落度でございますから決して子供さん方に罪があるのではございません。たゞ私は、彼の

一

驚が可哀さうでなりません。』さう言つてポロ〳〵泣いてゐた。

子　ほんたうに偉い主人ですね。そしてお父さん、その人には子供はなかつたのですか。

父　ウム……さうきかれると……彼の牧場の主人には子供がなかつたやうだつたね。あゝ悪いことをしたものだ……。（お父さんの眼は涙ぐんで聲もふるへてくる）

子　……。

―ちまや―

少女慰の日（一幕一場）

―時―　晩夏の白晝。紺碧の空高く澄み渡り、時折白雲その空をかすめて過ぎゆく。

―慰場所―　勇の庭園の一部、勇の書齋の窓下。そこには空高く聳え立ちたるプラターヌの立樹數本あり。その青葉には明るき日の光ふりそゝぎ、立樹の周圍に形よきベンチ二脚あり。

―日人物―　勇（夏子の兄）二十五位。
夏子
幸子
登紫子
多満子
皆お友達。年齢十四五位。

（談話の凡てはゆつくり落着いて行ふ）

慕静にあく

夏子　多満子さん。登紫子さんは最うお歸りになつて？

多満子　えゝ昨日お歸りになつたのですつて。

―慰

勇　登紫ちやんは何處かへ行つてゐらしたの？

夏子　房州へ行つてゐらしたのですつて。

の

勇　房州へ？

日

幸子　ほんとうに登紫子さんはお可哀さうよ。

―

多満子　ほんとうにねえ。

勇　どうして？

夏子　どうしてつて、お兄さんご存じないの？

勇　知らない。何處が悪いの？

夏子　何處つて、そんなこと言つちやわるいわ。

幸子　さうよ。

多満子　言はない方がいゝわ。

―慰

勇　それじゃ無理に聞きたかないけれど肉體の悪いのは一ばん不可ないね。

夏子　話しませうか。

の

幸子　いゝでせう。お兄さんだから。

多満子　ね。お兄さん誰方にもおつしやらないやうにね。

日

勇　よござんすとも誰にも言ひやしませんよ。それじやゲンマンしませう。

―

夏子　あら！ゲンマンですつて、お兄さんは誓をおたてなさるのね。

さあ誓のゲンマンですよ。（夏子、多満子、幸子の三人小指を出して勇の小指に組み合せる）

幸子　あなたおつしやいよ。

夏子　私？あのね、登紫子さんは胸の病氣よ。

勇　胸の病氣！あゝ夫れじあ……さう。お氣の毒だねえ。それで房州の海岸へ保養に行つてゐらしたのですね。

幸子　ほんとうにお氣の毒よ。お友だちが皆さう云つてゐますわ、あの病氣になると中々なほらないんですつて、そして怖ろしい病氣なんですつて、人にも傳染るから氣をつけなければ不可ないつて、さう言つて皆がなるべく遊ばないやうになつてしまつたのですよ。

夏子　可哀さうにねえ。

多満子　あら！彼方から來るのは登紫子さんじやなくつて。

幸子　さうよ。登紫子さんだわ。

夏子　呼んで見ませうよ。

幸子　（一緒に）登紫子さーん？

駅の日

勇　（門のところから駈けながら皆のところへ來て挨拶する）

登紫子　何時お歸りになつたの？

勇　昨日。

夏子　登紫子さんおかけなさい。

登紫子　（前の勇のかけてゐるベンチの反對の方のベンチ、多満子と夏子の間へ腰かける）

勇　如何でした登紫ちやん。房州はいゝところでせうね。

登紫子　えゝいゝところでした。

勇　毎日何をしてゐらしたの。

登紫子　毎日？（淋しさうに笑ひながら）女中と二人で海岸へ貝拾ひに行つたり叢の中のキリギリスをとつたり、そんなことばかりしてゐましたわ。

夏子　でも登紫子さんは大へんお肥りになつて、お丈夫さうにおなりになつたのね。

登紫子　いゝえちつとも。（淋さうに）

幸子　やつぱり宿屋にお泊になつてゐらしたの？

登紫子　いゝえお寺よ。

―駅の一日―

多満子　お寺？

夏子　恐いでせうねえ夜なんか。

登紫子　そりや少しはねえ。

勇　そして何か面白い話でもありませんでしたか。

登紫子　面白い話なんかありませんのよ。だけど恐い話ならありますわ。

幸子　恐い話？

夏子　して頂戴な、その恐い話を。

勇　どんな話？

登紫子　あのねえお兄さん。私の泊つてゐたお寺は隨分大きなお寺なんですのよ。そ

してね。

多満子　何んだか恐くなつて來たわ。

幸子　あら、あなた隨分意氣地なしねえ。

夏子　いゝわ。默つてゐらつしやいよ、それから。

―駅の一日―

登紫子　そして夜になると、シインとしてしまひますの。そして何んにも聞えなくなつてしまひますの、たゞ遠くの方で水の流れるやうな音が、淋しく聞えますのよ。さうして暗い夜がだん〳〵沈むやうに更けてゆく夜中頃になりますと、屹度毎晩のやうに私達の寢てゐる座敷の椽の下の方がユラ〳〵、〳〵と

夏子
幸子
多満子
勇
（一緒に）おゝこいはい!!!

それは何んでせう？

登紫子　和尚さんが言ひましたわ。それは彼方にある大學の解剖室の死人の魂が夜になると出て歩いて、このお寺へも遊びに來るんですつて。

夏子　ほんとうでせうか。

登紫子　そして和尚さんが言ひましたわ。夜になると、その解剖室のドアがすつかり鍵をかけてあつても、ひりでにスウッと開くんですつて、そしてまたもとのやうにスウッと締るんですつて、それは先に死んだ人の魂が呼びに來るのですつて。

幸子　魂が？　魂てどんなものでせう？

多滿子　魂て眼には見えないものないよ。

登紫子　そしてねお兄さん和尚さんが言ひましてよ。靈魂は不滅なものだつて、ほんゝでせうか。

勇　靈魂は不滅？　さうです。その和尚さんの言つた通りだと私も思ひます。

登紫子　それから私大さう安心しましたのよ。

夏子　どうして？

登紫子　私（淋しさうに）病氣なんか癒らなくつてもいゝと思ひましたわ。えゝほんとに死んでもいゝと考へましたのよ。

勇　どうしてまたそんなことを。

登紫子　でも私死んだつてもかまひませんわ。私が死んでも私の靈魂はやつぱり何時までも殘つてゐるのですもの。そして何處かで自分の好きな人に逢つたりお話をしたり出來るのですもの、唯生きてゐる人には夫れが見えないだけのことですもの。和尚さんのおつしやつた通り、それは消えずに殘つてゐて、何處かにあるのですもの。

勇　登紫ちやん。あなたは偉くなりました。ほんとうにあなたは強くなりました。あなたのご病氣も屹度近いうちにお癒りになりませうよ。あなたのやうな

幼い方にそんな高尚なことは考へられるものではないのですがそれは皆その病氣のために考へられることなのです。人間といふものは、何んにでも苦しめば苦しむほどいろ〳〵な深いことが解つて來るものです。そしてどんなことも恐くも怖ろしくもなくなるものです。

―慰　夏子　登紫子さん。ほんとうにあなたご丈夫におなりになりますわ。

幸子　ほんとうよ。そして今までより偉いことを考へられる、強い方におなりになつたのですわ。

―の　多滿子　ほんとうにさうよ。

―日　登紫子　ありがたう皆さん。私今日此處へ來てよかつたわ。ほんとうに私の心は強くなりましたわ。

勇　それでいゝのですわ。お互に私たちは強いやうでも弱いものですから、皆で慰め合つてゆかなければなりませんわ。

夏子　慰め合ひませうねえ。

幸子　そして助け合つて。

多滿子　力になり合つて。

―慰　勇　仲よく暮しませうねえ。

（プラターヌの葉にひとしきり風渡りバラ〳〵バラ〳〵と美しい響を立てる）

―の　幸子　おゝ涼しい。

―日　夏子　あれあんなに葉が音をたてゝ……。

登紫子　奇麗ですこと。

音樂

勇　プラターヌの葉でさへあゝして皆手を觸れ合つて仲よくして行くのですよ。

多滿子　一

夏子
登紫子
勇
幸子

（手を握り合て）私達も――。

――慰の日――

音樂（幕）

少女劇　星の世界　一幕一場

――星の世界――

場所　千代子の屋敷、廣き庭園の一隅、盛り上つた美しき芝生の上、其所より餘程離れたるところに、白塗の洋館あり、窓より電燈の光射し、その周圍には數本の椰子樹空高く聳え、庭の諸所に苅り込まれたる灌木の茂みなどあり、其洋館に通ずる礫道の兩側には種々な草花、古代織物の模樣の如く種々なる色を取り合せて植るつけあり。

時　初夏のよく霽れ上つた夜。空には美しき星數多瞬く。

人物　千代子
　　そのお友達
　　小枝子

咲子
須美子
千代子の母（動作凡て其場合に從ふ）

幕靜かに開く

―星の世界―

小枝子　ほんとうに美しい空でございますこと。彼麼に高い、彼麼に遠いところに澤山耀やいてゐる星をごらんなさい。彼の星の世界には何が棲んでゐるでせうか。

咲子　然うですね、彼の星の中には屹度美しい天女樣達がゐらつしやるのでせうよ。

須美子　私は彼の星の國には唯美しい山や、森や、野や、原があるだけで、他に何んにもないのではないかと思ひますわ。

千代子　いゝえ。私たちのやうに、かうして下界に住んでゐる者には、唯毎日毎日の出來事より他のことは解らないものですけれど、ほんとうは星の世界に住んでゐるものがあるのですつて。お父樣がおつしやいましてよ。

小枝子　ではあなたのお父樣には夫れが解つてゐらしつやるの。

千代子　いゝえお父樣にも解つてはゐらしやらないのですつて。けれども或外國の偉い學者の人は、彼の星の世界に何がゐるだらうと思つて、高い山の頂へ立派な天文臺をこしらへて其所で一生涯かゝつて研究して見たのでございますつて。そのこともお父樣がお話してくださいましたわ。

―星の世界―

須美子　然うしたら何が見えたのでせう。

千代子　さう？何んとかおしやいましたわ。……あ、さうでした。永遠の子達が見えたのですつて。

……

咲子　永遠の子？どんなものでせう。

須美子　夫れはその學者より他には見ることも知ることも出來ないものでのつたさう

ですの。そしてその方は自分がそれを見ることが出來たので非常に歡んで、世の中の人々に對つて斯う云つたのですつて。

（私は星の世界の永遠の子達を見た。彼處は何んといふ美しい世界であらうまた何んといふ樂しいところがあらう。けれども世の中の人達！あなた方には夫れは見えないのだ。いや見ることが出來ないのだ。あなた方は餘り下界の出來事ばかりに浸り過ぎてゐる。そのためにあなた方の眼や心はさういふ美しいものを見る事が出來なくなつてゐる。然しあなた方も何時か一度は屹度彼の永遠の子達を見る時が來るのであらう。夫ればかりではない。あなた方この地上のあらゆる人達は、やがて彼の永遠の子達と共に樂しく遊ぶことが出來るようになるであらう。あなた方もその永遠の子となつて星の世界へ行かれる時が來るであらう）

然う言つたのですつて。

須美子　では何時さうなれるのでせう？

千代子　それはこの世の中に戰鬪や、憎惡や罵り合ふことが全くなくなつた時ですつて、世の中の人々が皆手を繋ぎ合つて、仲よく暮すことが出來る時ですつて。

咲子　其麼時が何時來るでせう。

千代子　夫れは誰にも解らないわ。屹度千年位先のことでせうよ。

小枝子　でも私達は其麼に先まで生きてゐられないから詰らないわ。

須美子　ほんとうにさうよ。

千代子　然うねえ。でもいゝわ、死ねば皆同じところへ行けるんですもの。

小枝子　何んだか今夜は淋しいのねえ。

咲子　彼方へ行きませうよ。

（其所へ千代子の母來る。）

母　まアあなた方此麼ところで何をしてゐらつしやいましたの。先刻から搜して

ゐましたのですよ。

咲子　……

須美子　小母さま。今晩は。

小枝子　……

千代子　あのね、お母さま。今皆で星の世界のお話してゐましたのよ。そしたら何んだか急に淋しくなつて終ひましたの。

母　然う。じや彼方へ行つてコーヒーでも戴きながら、皆さんで何か賑やかな面白いお話でもしませう。ね。夫れがいゝでせう。

皆よろこんで母様の後からついて行く。彼方の洋館から千代子の姉さんのひいでゐるらしいピヤノの音ゆるやかに流れて來る。

千代子　あら！お姉様が。

須美子　綠の鳥の歌よ。

咲子　さうよ

小枝子　唱ひませうよ。皆で。

千代子　じや皆で一緒に……。

（歩きながら四人聲を合せて唱ふ。）

雪の降る夜の森に來て。
鳴くは綠の鳥である
ほゝろぽつぽうぽうぽう
ひとりぼつちの綠の鳥は
親も子もない溫く眠る巢もない
可愛さうな小鳥
雪の降る夜の森に來て

鳴くは緑の鳥である
ほゝろぽつぽうぽろぽつぽう
（ピアノ音なほゆるやかに流れ來る）

靜に幕

醫師ドオバンの首

（一幕二場）

時代　昔
所　ギリシヤズーマン王國の宮殿
人物　ズーマン國王　四十歳位
大臣　五十歳位
醫師（哲學者）ドオバン六十歳位
ドオバンの弟子　二十五歳位
侍女　數人
從者　十數人

處刑者　一人

第一場

幕開くと廣大美麗なる王宮の一室。上手にズーマン國王華麗なる椅子に倚り、その次に大臣控え、以下家臣の者等居並ぶ。

王　ドオバンは參つて居るか？

家來　お次に控えて居ります。

王　すぐ此所へ連れて參れ！

家來　はッ。（退場する）

（間）　ドオバン大なる本を抱えて、首を垂れながら靜かに歩み來る。その本を王の前の机に載せ。

ドオバンこれがお約束申上げました世にも不思議なる本でございます。これを陛下に

献上いたします。この本の中には、世の中のありと凡ゆる不思議といふ不思議、秘密といふ秘密が書いてございます。私の首をお切りなさいまして後、第六頁の初めの行をお讀みになつて、その時私にお聽き下されば、私の首は陛下のお問ひに對しまして、どのやうなお答でも致します。

けれども陛下。私は最う一度命乞ひをいたします。どうぞお考なほしをお願いたします。私は、陛下に對しまして、少しの惡いことをもいたしませんでした。

王　生かして置くことは出來ぬわ。

ドオバン　私は決して自分の恩を賣らうとする者ではございません。けれども陛下。今から五年以前のことをお考下さいませ。彼の時私はこの隣國から參りました。陛下は恰度その時、世にも怕るべき癲病にお罹り遊ばしてゐらつしやいました。お傍の醫者達が、どのやうに手を盡しましてもお癒し申上げること

が出來ませんでしたのを、私は、私の有つてゐる凡ゆる學力をもつて、凡ゆる智識を以て、そして、陛下を信じ、陛下を愛するこの限りなき誠實を以て、何の呑み藥も、塗り藥も用ひず唯の一夜のうちに全くお癒し申上げました。彼の時陛下は何んとおつしやいました。私の手をお握り遊ばして、

『ドオパンよ。汝は俺の生命の親である。』さう言つて、お泣き遊ばしたではございませんか。彼の時、陛下のお流しになつた涙が消えて終つたやうに私の今日まで盡して參りましたことが、悉く消え去つて終ふものでせうか？

王　いゝえ、それは餘り情けなうございます。

ドオパン　それは俺にも解つて居る。

王　そして陛下は、その時お歡びの餘り、私に赤い衣を賜りました。このギリシヤの國に於きまして、王のお手から赤い衣を賜るといふことは、この上ない榮譽なのでございます。他國人の私が、この絶大なる榮譽を擔ひました。そ

の御恩に酬ゆるため、今日まで五年の間私は陛下を信じ、陛下を愛して仕へて參りました。私は何んの惡いことをも致しませんでした。陛下。私をお信じ下さいませ。

王　それは俺にも解つて居る。然しその汝の優れた醫術の力、不思議なる藥力がやがては俺の生命を奪ふことになるのじや。今汝の生命を斷つのは、俺の生命を救ふ爲なのじや。

ドオパン　どうして私が陛下のお身の上に危害を加へようとするものでございませう。夫れは皆、陛下に不忠なる者共の讒言でございます。陛下私をお信じ下さいませ。そのやうな證據が何處にございまするか。無實の罪に陷入れようとする者こそ、やがては陛下のお身の上を危うするものでございます。そのやうな言葉にお欺かれなさいますな。陛下私をお信じ下さいませ。お宥しをお願申します。今一度お考なほしをお願いたします。

王　いや。俺は何よりも國を大切に思ふて居る。それ故自分の生命をも大切に思ふて居るのじや。そのやうな言葉に瞞されて、汝を宥すと思ふか。汝の生命は昨夜一夜だけ延して遣はしてある。最うこの上の生命乞ひは無駄なことだ敵國の廻し者と知れた其方をこの上一日でも生かして置くことが出來るか、

大臣　ドオバンはその醫術が優れて居りますると同じやうに、言葉も亦巧みでございます。つまらぬ繰言にお瞞されなさいますな。ドオバンが敵國の廻し者で王のお身の上をつけ狙ふ者であることは、明かなことでございます。私とてもこのズーマン國の政事を司る者でございます。どうして私の言葉に間違ひがございませう。陛下。時間の經ちませぬうち、早くドオバンの首をお切りなさいませ！

弟子　この時ドオバンの弟子走り出で、

陛下。私はドオバン博士に幼い折から慈み敎えられた者でございます。どうして博士が敵國の廻し者でございませう夫れは皆憎むべき大臣の讒言でございます。大臣は五年この方博士が陛下の厚い御恩寵を蒙つて居りますることを妬んで博士を無き者にしやうと計つたのでございます。陛下。そのやうな巧みな言葉に欺かれて、世にも稀なる學者の生命をお奪ひなさらうなどなさいますな。陛下どうぞお宥しを願上げます。

王　宥すことはならぬわ。

弟子　では陛下、私を博士のお身代りにして下さいませ。此の世の誰よりも愛し敬ひまする博士のお身代りになりますことは、此上ない歡びでございます。それに博士には未だこの世に殘すべき多くの仕事がございます。その仕事が終りませぬうち、尊い博士の生命を失ひますることは、白日の太陽を奪ふやうなものでございます。

どうぞ博士の生命はお助け下さいませ。

王　えゝ!!!　ならぬと申すに。俺は一國の王であるぞ。王たる者がひと度口に出したことが後へ退けると思ふか！

弟子　ではせめてその仕事の濟みまするまで。

大臣　控えい！陛下に對つて重ねての願ひは無禮であらう。一日でも生命を延してゐる間に、どのやうな恐ろしい計謀をもつて、陛下のお身の上に危害を加へるかも知れぬ。陛下。ドオバンは世にも怕るべき大惡人でございます。少しも早く首をお切りなさいませ。夫れに陛下とお約束申上げた通り、切られたドオバンの首が物を言ふといふではありませんか。そのやうな珍らしいことが見られるではございませんか。

王　おゝ、然うである。ドオバン汝の首は必ず答をするであらうな。

ドオバン　必ずお答はいたしまする。然し陛下。今一度御慈悲をお願いたします。私は全く罪のないものでございます。

王　えゝッ！默れ。叶はぬ願じや。最早汝に罪が有らうと無からうと、それを糺さうといふのではない。俺は汝の首が物を言ふのを見たいのじや。早う。ドオバンを引立てゝ首を打て!!!

ドオバン（王をにらみつけ、）このやうな慘忍な罪の酬は必ずお受けなさいませうぞ。

王　えゝ聞く耳持たぬわッ。早くせぬか。

處刑者　ハヽッ——ドオバンを連れて入る。

この時侍女三人走り出で聲を合せて。

侍女　ドオバン博士には何の罪もございません。どうぞお宥しを願ひ上げます。

王　ならぬと言ふのに。

大臣　無禮者。退り居らう。

侍女達泣く。

——長い間。舞臺の空氣次第に暗くなる。

第二場

王　未だ首を打たぬか。其方行つて見て參れ。

家臣　彼の家臣一人立ち走る（間）

ドオバン博士は首を陛下の御前へ持つて出るよう申されました。

ドオバンの首机の上の大いなる皿の上に載せられ、數人の家臣の手によつて靜かに陛下の御前に持ち出される一同顏色を變へて夫れを見護る。此時ドオバンの弟子走り寄つてドオバンの首の額に接吻しようとする。大臣これを見て、

控えい！

弟子退る。この時その首は靜かに眼を開く。舞臺益々凄慘なる空氣に充さる。

首　靜かに陛下本をお開き下さい。

王　王その言葉に從つて其本の頁を開きはじめる。本の形大きく、紙厚いため指を唇にうつして指先を濕らせて一枚づゝ、其度に指を濕らせてめくる。第六頁のはじめの行であつたな。

王　そこを見て、

首　ドオバン。此處には何も書いてはないぞ！

王　本に塗り置きたる毒次第に廻り、王の息氣高り、顏色變り、その手次第に激しく震える。

首　では第八頁をお開け下さい。

王　王前と同じやうにそこを見て、

首　此處にも何も書いてはないぞ！

王　では第十頁をお開け下さい。

王　如じく

王　おゝ——こゝにも。

毒次第に廻り來り、苦悶しながら、

首　ではその次を。

王　ドオバン此處にも——。

首　ではその次。

王　……。

王　遂にその本の上に例れ。

首　おゝ。ドオバン……汝は俺を瞞したな！

首は王をハッタと睨みつけ、冷たく高い聲を擧げ、

暴虐なる王よ！その本には悉く毒を塗つて置いたのだ!!! 猥りに暴威をふるつて罪なき者を殺し、恩に酬ゆるに仇をもつてした慘忍なる罪の酬を今こそおもひ知つたであらう!!!

王　王息絶えながら微かに

おゝドオバン俺を宥してくれ……

（靜かに幕）

誰の罪

一幕　第一場

―誰の罪―

甌僂の小人、手に小さな皷を持ち、往來にて歌を唄ひながら踊をおどつてゐる。

其所へ仕立屋夫婦通りかゝり、その達者な藝に見恍れて感心してしまふ。

妻　まアほんとうに踊の上手な小人さんですこと！（さう云つて主人の顏を見る）

仕立屋　（その言葉を受けて、自分も如何にも感心したといふ顏をして）ウム――（首を傾け、腕を組み）然うだ。而して歌も中々甘いものだ。（妻の方をかへりみながら）どうだね、一つ家へ連れて往つてやつて貰はうじやないか？

妻　（嬉しさうに）夫れがよろしうございますわ。

仕　（小人の傍へ行きその肩へちよつと手をかけながら）どうだね。ご苦勞だが俺の家へ來て一つその面白い踊をやつては呉れないかね。

小人　へエへエあり難う存じます。では早速お供をいたしませう。へエへエありがたう存じます。（斯うして三人退場する）

（臺舞裏が三人の話聲きこゑる）

―誰の罪―

仕　そら、彼方に郵便函が見えるだらう。ね、その少し先に煙草屋の赤い看板が見えるだらう。彼の横の通を最う少し曲つたところなんだよ。

妻　もう直きなのですよ。三丁とない位なのですよ。

小　へエへエ左樣でございますか。へエへエ。

第二場

仕立屋の店。入つたところにテーブルあり、その周圍に椅子並べられてあり、そのほか仕立用の道具よろしく配置せられてあり。

小　（珈琲を呑んだ後）では旦那樣、早速何か踊つてごらんに入れませうか。

仕　さうさねえ。何んでもおまへさんの得意なものを踊つて貰ひませうかねえ。

妻　小人さん。面白いものをやつてくださいな。

小　へエへエかしこまりました。では私の一番得意なものをごらんに入れませう。

（仕度をして、すぐ踊りながら唄ふ。）

ペペロッポッポウペロポッポウ
遠いお山のむからから
一羽の鳩が飛んで來た。
わしのお國は紫の
山のむかうの森の中、
ひと日ひと日は葉の繁り合ふ
枝を枝からまた枝に

氣樂氣儘に暮します。
ポロポッポッポウ
晝は日が照り夜はまた夜で
星はチラチラ彼の空で
踊をどつて見せても呉れる。
幸福の赤い木の實を枝から枝に
捜し歩いてペロポッポウ
ペペロポッポウペロポッポウ。

小　如何なものでございませう？。

仕　ウム、中々うまいものだ。全く天下一品だ。

妻　小人さん大へんお上手でございますのねえ。もう一つやつてくださいな。

小　お褒めに預りましてまことに恐れ入ります。へエへエでは最う一つごらんに入

れませう。今度は兎の踊といふのでございます。

（唄ひながら踊る）

月が出た出た彼の山に
月の中には兎がござる
ピヨコポンピヨコポンピヨンポコポン。
兎毎時でも餅ついてござる
ピヨコポンピヨコポンピヨンポコポン。

（仕立屋夫婦手を拍いてほめる）

小　（汗をふきながら）どうも恐れ入りました。ヘエヘエ。

妻　どうもご苦勞樣でございました。お疲れでございませう。どおぞお掛ください。

小　ヘエヘエありがたうございます。（腰かける）

仕　（妻の方を見ながら）小人さんに何かご馳走してあげませうよ。おかげで今日はほんとうに面白い思ひをしたものだ。

妻　（立ち上りながら）ハイ少々お待ち下さい。早速支度を致しますから（奥へ入る）

仕　（小人に對つて）小人さん。おまへさんは何時から此麼職業をはじめましたか。

小　ヘエヘエ。なアに私も以前から此麼賤しい職業をやらうと思つたのでもございませんでした。私は彼の御殿に仕へて居りました貴族の子に生れたのでございますが、恰度私が十五の時に兩親が亡くなつてしまひますし、おまけにその年に此麼生れもつかない片輪になつてしまつたものですから、夫れからといふものは、是う何をしようたつて駄目でした。ハハ、、、、人間の運命といふものは全く解らないものでございますよ。私にだつてもとは大きな望もありましたさ。けれども今麼ことを言つて見たところで仕方のないことでございますよ。まア〳〵かうして生きてゐられるだけが幸福と思つてゐるのでございますよ。何

もかもみんな神様のおさばきですからね、さうでせう——今私があなたとこうしてお話をしてゐます、けれどももう五分先、もう十分先——もう一時間先にや、ころりと死んで終ふかも知れませんからね。（悲しさうな顔をして下を向きながら）ハハ……

任

（感じ入つて）然うだとも、全くだ。人間の運命といふものは、全く誰にも解らないものだ。おまへさんのおつしやる通り、何もかも神様のおさばきなんだ。

小

（氣を換へて）いや〳〵話が陰氣になつてしまつた。折角面白いおもひをしたと思つたら——何か歌でも唄つて呉れないかね。

（じつと上を見上げながら、何か見えないものゝ影をもとめるやうな顔をして）あゝほんとうに氣がめ入り込んでしまひました。何んだかこんなお話をしましたら急に亡くなつたお母様が變しくなつて來ました。彼の美しいご殿の花園で、春の晴れた日に小鳥と一緒になつて、奇麗な緑の草の上へ寢轉びながら、歌を

唄つた子供の日が變しくなりました。ほんとうに彼の時分は樂しかつた。（その時分のことを思ひ出して、母を慕ひてといふ歌を靜かに悲しさうに唄ひ出す）

光の國の王子様は
白いお馬に跨づて
金の鈴やら銀の鈴
鳴りひびかせてゆきました。
シャララランシャン
シャララランシャンと
遠い旅へゆきました。
母さまをたづねるための
あてのない長い旅路へ

はるばると
青天鷺絨の服を着て
赤い薔薇やら紫の
菫の花を白馬の
そのたてがみにかざりつけ
シャラランシャン
シャラランシャンと
湖のほとりをとほり
幾つもの峠を越えて
白樺の林をゆけば
澤山な緑の羽根の小鳥らが
チチチチと鳴きチチチチと

あとからあとからついて來る。

妻　（この歌の中途に妻奥の間より膳部を整へて來りその歌を立ちながらきゝ入り、悲しげに頭を垂れる）

仕　（腕組をして瞳を閉ぢてきいてゐる）

小　（唄ひ終つてわざと陽氣に）ハハ……いやどうもくだらない愚痴をこぼしました。まことに相濟みません。

妻　どうもお待どう樣でございました。ほんとうに何もございませんのですよ。でも今海からあがつたばかりの魚がございましたので、フライにして見ましたのよ。どうぞ澤山召上がつてくださいましな。

仕　さうか。じやあ皆で一緒に頂くことにしよう。まア〳〵小人さん、ずうつとお寄りなさい。

小　ヘエヘエこれはご馳走樣でございます。

（三人共卓に向ふ）

仕　（そのフライをフォクで刺したのをちよつと口に入れて）ウムこのフライは中々上出來だ。小人さんの踊のやうにうまいものだ。アハ……。

妻　ホホ……有り難うございます。あなたはまたお褒になることが小人さんの踊のやうにお上手でございますこと、ホホ……。

小　（夫れを食べながら）これはまた結構なご馳走でございます。こんなご馳走はめつたにいたゞくことは出來ません。大層おいしうございます。（さうして食べてゐるうち、忽に魚の骨を喉に刺して苦しみはじめる）アッ。アッ。ウム〳〵。

仕　（その樣子を見て）おゝこりや大へんだ〳〵喉へ骨を刺したのだ。早く〳〵象牙の箸を持つてお出なさい、早くだ〳〵。

妻　（愕いて飛び上り椅子の周圍をぐる〳〵廻りながらウロ〳〵して）家には象牙の箸はございませんですが。

仕　（小人をしつかり抱えながら）えゝ無ければ何んでも構はない。竹の箸でも木の箸でも。

妻　（奥へ駈け込んで火箸を持つて來て）これでは如何でございませうか。

仕　あゝこれは火箸じやないか。えゝ仕樣がない。これでもいゝ（それで咽をさする）

小　（益々苦悶する）

仕　駄目だ〳〵。早く水を、水だ〳〵。

妻　（奥へ飛び込んで空虛のコップを持つて來て主人に渡す）

仕　（それを小人の口へあてゝあゝこれや空虛つぽちやないか。

妻　（再び奥へ入り水を入れて來る）

仕　（受取つてそれを自分で一息ぐつと呑んで）あゝこりや不可ない。まちがつた。もう一ぱい。

妻　（夫れを受取つて奥に入り、再び水を持つて來た時小人既に絶命す）

仕　（小人の顔と妻の顔とを交々見て）あゝ駄目だ。死んで終つたよ。

妻　（ぼかんとして小人を見入る）

仕　（暫らくして立ち上り、両手で頭を抱へて）あゝッ！俺は飛んでもないことをして終つた。若しもこのことがお役人様の耳へでも入らうものなら、夫れこそ大へんなこつた。下手にやると、俺等は人殺の罪人として牢屋へぶち込まれるかも知れない。さアどうしたらいゝのだらう？。

——誰の罪——

妻　然うでございますねえ。大へんなことになつて終ひましたねえ。

仕　ほんとうのこつた!!!この小人が先刻云つたつけ。人間の生命なんてものは、今の五分先に無くなるかも知れないつて。そして何もかも神様のおさばきだつて、（間をおいて）でもこのまゝにしちやあ置かれないどうしたものだらうか？

妻　ほんとうにどうしたらいゝのでせうねえ。（暫らく考へてゐたが）あゝいゝことがございますわ。（ちよつと主人の耳へ口をあてゝ）……。

仕　ウム……ウム……ウム……なアるほど。（聲を大きくして）ちゐ彼のお醫者さんのところへ、急病人だと云つて擔ぎ込んで、そのまゝ玄關先へ置きつ放しにして來よとういふのだね。

妻　もつと靜かな聲で！（主人を手でたしなめながら）ね。さうすれば誰にも解らないし、私達の所故にもなりはしないでせう。

——誰の罪——

仕　ウム。なアるほど……おまへは中々智慧が有るわい。では早速擔ぎ込んで來ることにしよう。（小人の死骸を擔ぎ上げながら）ウントコショ。

——幕——

第一場

醫師の家の玄關先。そこに石段あり。時は暮方。

仕　えゝちよつとおねがひ申上げます。

女　（手に手燭をもつて出て來る）

仕　唯今急病人が出來ましたのでこの通り擔いでお願に上つたのでございますが、どうぞ先生に然う申上げていたゞきたいのでございますが……。

女　困りましたねえ……私共では夜分は一切患者を診ないことになつて居りますが……夫れに先生は唯今お留守でございますよ。

仕　そんなことをおつしやらずに、何しろこんな急病人なんですから一分間でも遲れましては大變なことにならないとも限りませんから、（ポケットへ手を入れて金貨を一枚取り出して）ほんとうにお手數をかけて濟みません。これはほんの少しばかりですが……。

女　（夫れを手に受けて仕立屋の顏と金貨とを見比べながらニッコリして）……少々お待ちください。先生はゐらつしやるかも知れませんよ。金貨の光でよく搜して參りませうよ。（奥へ入る）

仕　（妻の方をふりかへつて）ほんとうに慾の皮のつゝ張つてゐる女中さんだ！さて

この間に――（肩から小人の死骸をおろして（これを――そうつと――かういふ風に此所へ置いて逃げ出すことにしようかな（石段の上へ置いて妻と二人でコソ〳〵と忍び逃げる）

……間……

醫　（獨語）急病人！それは〳〵。（歩きながら奥より玄關先へ來て見たが姿が見えないので手さぐりで石段の方まで出て來る）。ウム〳〵、そしてその患者は何處にゐるのか？暗くつてさつぱり見えやしない。死體を踏みつけてビックリして二三歩後へとびさがり）おやッー（またその傍へ歩み來り手さぐりで額、胸などへ手を當てゝ見て）おや〳〵おやッ！こりや大へんなことをして終つた。患者を踏み殺してしまつたのだ。何故俺は燈火の來るのを待つてゐなかつたのだらう大事な患者を踏み殺して終つたのだ。若しもこのことがお役人の耳へでも入らうもんなら、それこそどんなことになるかも知れない。そうなれば牢屋へほう

り込まれるのは知れ切つたことだ。幾程俺が醫者でも一度死んで終つたものをまた甦らせることは出來やしない。夫れはキリスト樣のおやりなさることだ。

――早くこの死骸を何處かへ隱さなくては――（腕を組んで暫らく考へる）然うだ!!! お隣の菓子屋さんの煙突の中へほうり込んでやらう。さうして置けば俺の故意にはなりはしないだらう。然うだ。然うだ!!!。

第二場

菓子屋の煙突の下の壁に倚りかゝつて小人立つてゐる。

（戸を開けて入つて來てそれを見つけ）おや。おや。おや〳〵〳〵!!! 俺の留守の間に誰か來たと見えるな。（透し見て）おい！そこにゐるのは誰だい？おい。フン返事をしないな。此奴は泥棒かも知れないぞ。俺の留守をねらつて入つて來たのだな。（大聲で）オイッお前は誰だい？何故默つてゐるんだ。いやこりや全く泥棒に違ひないぞ、此間中から、バタやカスラを盜むのは鼠だとばかり

思つてゐたら、この泥棒の仕業だな。太い奴だ。煙突から忍び込んで來たのだな。ヨシ！泥棒なら斯うしてくれるぞ（持つてゐたステッキをふりあげてメチヤ〳〵になぐりつける）（いくらぶつてもじいつとしてゐるので、暫らく手をとめてよく樣子を見てゐたが忽ち青くなつてふるえ上り）

さアこりや大へんなことをして終つたわい。ぶち處が惡かつたと見えて、とう〳〵息の根をとめてしまつた。若しもこのことがお役人樣のお耳へでも入つたら、それこそ大へんなこつた。早速引捕つて怖ろしい牢屋の中へぶち込まれなくてはならない。さうだ。誰にも知れないうちに、早く何處かへ隱してやらなければならない。さうだ。彼の町端れへ拾てゝ來よう。さうして置けば、誰にも知れる氣遣ひはあるまい。また俺の故意にもなりはしまい。さうだ。（死體を

第三場

菓

暗い夜。町端の曲り角の土塀に死體立てかけられてある。其所へ金持の商人醉つてフラ〳〵して來る。

商人　あゝまつ暗な晩だ。空には星一つありやしない。ハハ……鼻を抓まれても解らないといふのは、こんな晩のこつた。エッブッブッ　思ひの外宴會の終ひが遲くなつたので……エッブッブッ！あゝ大分醉つた。斯ういふ晩に限つて追剝が出るんだ。なアに追剝なんかちつともこわかないぞ！出るんなら出て見ろ！斯う見えてもこの市で俺位力の强い者は他にあるまい。ハハ……夫れにまた俺位の金持もあるまい。ハハ……一萬噸の汽船が百艘と、オットブッブッ。金貨が山ほど入る倉庫を三千と……夫れから……ブッブッ……ハ……（さうしてだん〴〵小人に近づきバタッと夫れにぶつゝかる）（とびのい）てそらッ！とう〳〵出たなッ！よしそんならかうして呉れるぞ。

（取組合つて小人を下にしてそれに馬乘になつてその喉を力まかせに締めつける）

追剝だ。追剝だ!!! 泥棒。泥棒!!!

（この聲をきゝつけて夜番の男走り來り提灯をさしつけて）

夜番　もし〳〵。如何したといふのですか。何んだつてそんなひどいことをなさいますか。

商人　冗談ぢやないよ。何がひどいもんか。此奴は泥棒なんだよ。追剝なんだよ。（なほ締めつけながら、不意に暗闇から飛び出して來て、突然俺に向つて來て俺の咽喉を締めつけようとしたんだ。だから俺はかうして取締てやるんだ。何ッ構はずに置いてくれ!!!

夜番（商人の片腕を押へ）それにしても最う夫れで十分復讐をしたのですから、夫れでいゝじやありませんか。さ。さ。放しておやりなさい。

夜番　あッ！こりやあ……死んでゐる！

商人　死んだ？

夜番　あなた。幾程何うしたつて人を殺すといふことがありますか。さア私と一緒にお出なさい。早速このことをお役人に申上げなければならない。そしてあなたは人殺のお審判を受けなければなりませんぞ。

商人（立つたまゝ呆然して）とんだことになつて終つた！あんまり懲らしやうが過ぎたのだ。大へんなことになつてしまつたわい。

三　幕　第一場

刑場。中央に裁判長控へその他の役人その兩側に並び、群集周圍に種々の服裝をして今日の小人殺人者を見物してゐる。

裁判長（高きところより夜番を見下ろして）その方は確かに小人が殺されてゐるところを見届けたと申すのだな。その言葉によもや偽はあるまいな。そしてその罪人は（傍に立つてゐる商人を指して）この商人だと申すのだな。その方の見違ひではあるまいな。

夜番　ハイ夫れは決して私の見違ひではございません。先程も申上げました通り、この商人が馬乘りになりまして締めつけて居りました處へ私が通りかゝりましたのでございます。ハイ、ハイそれがどういたしまして私の見違ひでございましてう。私は生れ付非常にこの（眼をさして）眼がよろしいのでございまして、……私の祖父爺がまだ丈夫で居ります時分によく申しました。『この兒の眼は千里先の蠅の髭まで見通せる』つて。ハイ、ハイ。ですからまア唯今では夜番といふやうな職業を選んでやつて居りますやうな譯で、ハイ、ハイ。この眼で一度睨みましたら、どんな暗闇の中に落ちてゐる小さな針でも屹度見付出せる位でございます。ハイ、ハイ。

裁判　もうよし。そんなに自慢しなくてもいゝ。よく解つた。

夜番　ハイ、ハイ。

裁判（商人の方へ向つて）これ商人。その方はこの國の掟として、何麼惡人でもみだりに殺した者は、同じやうに命を取られなければならないといふことは、よく心得て居るであらうな。そしてこの夜番がいふ通りその方は確にこの大罪を犯したに相違あるまいな。

商人　ハイ。その掟もよく承知致して居りました。またこの大罪を犯しましたのも私に相違ございません。けれども私は初めからこんなことにならうと思つたのではございませんでした。懲し樣が過ぎたのでございます。でも今となりましてはどうしやうもございません。私は自分の犯しました罪の前には覺悟は定めて居ります。判官樣。どうぞ掟通りに私の罪をお審判くださいませ。（首を垂れる）

裁判　よし。もうその上詳しく聞くこともない。早速その方は罪に服すがいゝ。これ刑手。早くこの者を引立て、打首に致せ！

刑　ハッ！（駈け寄つて商人を引連れて行かうとする時、群集の中より飛び出した

某　る一人）

お役人樣。お役人樣。少々お待ち下さいませ、おゝ賢明なる判官樣に申上げます。この罪を犯しましたのは、私なのでございます。全く然うでございます。そしてこの商人には何の罪もないのでございます。ハイ、ハイ、これにつきましては、その譯を申上げませんでは、お解りにならないでございませうが、實は私が家を留守にいたしました間に小人が煙突から忍び込んでゐましたのを私はテッキリ泥棒だらうと思ひましたので、ステッキでひどくなぐりつけましたのでございます。ハイ。それが少し強過ぎたと見えまして、可哀さうなことをいたしました。息の根を止めてしまつたのでございます。そんなことにならうとは思はなかつたのでございますが、もうさうなつてはどうすることも出來ませんそれで、私は自分の罪を隱して他人に塗りつけようと考へまして、町端の土塀のところへ立てかけて置いたのでございます。ハイ、全くでございます。

でございますから、この罪は私が犯したのでございますから、判官様。どうぞ私をお審判なすつて、この人をおゆるしなすつてくださいませ。この人には何の罪もないのでございます。

裁判　なアーるほど。夫れでよく解つた。刑手、商人をゆるしてその男を罪に致せ。

刑　（菓子屋を引立てゝ行かうとすると、今度は群集の中から醫者が出て來て）

醫者　あゝもし〳〵。少々お待ちを願ひます。判官様。いや此處にお見えになる皆様方。おゝ夫れから……天にます神様にお誓ひ申して私が、この罪人である ことを申上げます。私がその小人を踏み殺したのでございまして、私は卑怯にも自分の罪を恐れて、菓子屋さんの煙突の中へ抛げ込んだのでございます。夫れを菓子屋さんは泥棒とまちがへたのでございませう。そして自分でなぐりつけた爲めに死んだのだと思つたのでせう。けれどもそれは全くのちがひで、私が踏み殺した死骸をその煙突の中へほうり込んで置いたのでございます。ですからその罪人は私なのでございます。判官様。私をお信じ下さいませ。そしてこの人をおゆるしなすつて、私を罪にお問ひくださいますようお願申あげます。これはまた何んといふことだ。刑手、罪人はまた異ふといふことだ。今申出た者を引立てい！

刑　（醫者を縛らうとする時、群集中より仕立屋夫婦出て）

醫　もし〳〵。お役人様。

妻　申あげます判官様。

裁　何と？

仕　小人を殺しましたのは私達夫婦なのでございます。大層踊が上手なものでございますから、手前どもへ連れて參りまして、踊つて貰つたお禮にお馳走をしたのでございます。その時に出しました料理の魚の小骨が小人の喉へ刺さつたのでございます。そして息が止つたのでございます。私達夫婦の者は非常におど

ろきましたが、もうどうすることも出來ないのでございます。ですから、そうつとお醫者さんの玄關へ置き放しにして來たのでございます。そして罪をのがれようといたしたのでございます。でございますから、罪は私達にあるのでございます。

妻　全くその通りでございます、判官樣。小人に御馳走いたしました魚の小骨が命を奪つたのでございます。それで……私達夫婦は夫をお醫者さんの玄關先へ……

（暫く考へて後立上り）あゝ。それでよく解つた。これは誰の罪でもない。夫れはその魚の小骨の罪！……いや、その魚を棲ませて置いた海の罪！いや、その魚を漁つて賣つた漁師の罪！いや、それを賣つた魚屋の……いや、それを買つた者の……いや、それを料理した……その庖刀の……その庖刀をこしらえた鍛冶屋の……いや、魚を載せたマナ板の……それをこしらえた者の……いや、これは益々解らなくなつた。（間）おゝさうだ！これは誰の罪でもない。運命の罪だ。

群集一同　運命の？

親判官　運命の罪である。

仕立屋
妻
菓子屋
醫者
商人
―群集―（一同聲を合せて）ほんとうに偉い判官樣だ!!!

群集一同（大きな聲を揚げて）ほんとうに偉い判官樣だ!!!二人とない名判官樣だ!!!

音樂と共に幕

暗い國

（一場一幕）

出てくるもの　土鼠の母（もぐ子　もぐ二耶）

場所　地面の中

もぐ子　お母さん。私すこし外へ出てみたいわ。外つてどんなにいゝとこでせう。

母　さうねえ。お母さんもこの年齢になるまで、まだ一べんも出てみたことがないから、よくはわからないけれど、何んでも鼠の小父さんの話では、大さう綺麗なところで、花は美しく咲いてゐるし、鳥は樹の上で囀つてゐるし、お月様は明るく光つてゐるところで、私たちの棲んでゐる國とは、まるで違つてゐると云ふ話です。

もぐ耶　僕も行つて見たいなア、花つてどんなものだらう？あゝそれからお陽様が明るいつて？明るいつてどんなもんだらう？鳥が囀るつてどんなことだらう？

僕にはまるつきりわかりやしない。

もぐ子　だから其違つてゐる外と云ふものをたつた一べんでいゝから見たいのよ。

母　それは大へん惡い望です。決してそんな望を持つものではありません。

もぐ二　なぜ？母さん、なぜいけないの？

母　それは恐ろしいことだからです。

もぐ子　恐ろしいこと？

母　えゝあのネ母さんは決して惡いことは言ひません。私たちはそんな願をかりにも心の中に持つてはいけないのです。

もぐ耶　何故？母さん。

母　さうきかれると、母さんは淋しい心持になりますけれども、それはどうすることも出來ないのです。

私たちはやつぱりかうして、この暗い土の中で月日を送らなければならない

のです。

もぐ郎　では母さん、僕たちの仲間ばつかりが、こんなにつまらないのでせうか。

母　いゝえ、皆がさうなのです。

——暗　もぐ子　そとの國のものも？

母　さうですとも！

い　もぐ二　あのう鳥といふものも？

母　えゝ。

國　もぐ郎　花といふものも？

母　さうですとも？

もぐ郎　いつも私たちの上でゴッゴッ音をひびかせてゐる人間といふものも？

母　さうです。何もかもみんなゐなければならないところに置かれてあるのです。

そして、何もかもみんなきめられてあるのです。

もぐ子　ぢやア、つまらないのは私たちばかりではないのですね。

母　さうです、だから默つてこの暗い國で仲よく暮すのが一番いゝことなのです。

もぐ郎　さう？母さん。

——暗　母　仲よくね。

もぐ子　恐ろしい望！恐ろしい望？でも一ぺんでいゝからそとが見たいわ。

もぐ郎　見られないかしら？

い　もぐ二　見てはいけないのかしら？

母　いけないことはありませんが、見た時は、自分の一ばん大事な命を失ふ時です。

國——　もぐ子　やつぱり見てはいけないのね。

もぐ郎　さうだ。

母　あゝ暗い。暗い國だ。（幕）

微笑の夕

あるところに、ひとりのやもめがありました、そのひとには、たつたひとりの子どもがありました。それの名をロイといひました。

ロイの髪の毛は大層うつくしく、日にでも照らされるときは、よく光りました。ロイは何ももつてゐません。他家の子が、りつぱなお人形をもつてゐたり、銀の時計をもつてゐたりしても、ロイには何もないのです。そのかわりロイには、美しい瞳と美しい髪の毛があります。これはお金で買へぬもの、お金ではもとめられぬものです。

ロイは、月の蒼く窓に射し入る夕。そこによりかゝつて、ぢいつと空をみあげてゐました。ひとはちの、草花は、あかるい色をみなぎらせて、月に映えてゐます。

おゝやさしき花よ。

もゝいろの
汝のねがひのかゞやきは
ひかりもれくる木の間
しづみてすめる水底に。

かう、ふと口づさみました。おゝ可愛いロイよ。

そしてロイは、月をみあげながら。

『マンドリンが欲しいなアー』と云ひました。でもそのねがひは、とほりませぬ。お金がないのですから。

その時ロイは、掌を合せて、神さまに祈りました。

『神さまよ。どうぞ私にマンドリンをくださいまし』。

神さまは、このねがひをきゝました。そして

『あの子はいゝ子だからマンドリンを與へてやらう』。かうお思ひになつて、空の高

いところからそれをなげてくださいました。
マンドリンは白い翼をちから、いつぱいにうごかして、下界のロイの窓邊へとんで來ました。
ロイは、それにみとれてゐました。
『なつてくださいマンドリンさん』。ロイがかういひますと、マンドリンはふしぎな音でひゝきあがりました。
近所のこどもたちはこれをきゝつけて集つて來ました。
するとその中のひとりの女の子がうたひ出しました。

わたしのお庭に
ひとはちの、
ゆきいろの花があります。
あるとき花のまわりに

ぼろぼろのくろい蟲どもが來て
ダンスをしました。
わたしもいつしよに
ダンスをしました。
するとまたそこいらの子どもたちも一つしよにうたひました。

野菜畑の
きりぎりす
けふもひねもす鳴きさかる
野菜畑に來てみれば
野菜畑で鳴いてゐる。

ロイは幸福でした。ありがたい泪が頬へたへながれました。
『光りはいつも微笑のかげにあるんだ』。ロイはひとりで胸のうちでおもひました。

（おはり）

大正十年九月二十日印刷
大正十年九月廿五日發行

定價壹圓六拾錢

著者　中條辰夫

發行者　東京市牛込區横寺町四十三番地　後藤誠雄

印刷者　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　新井由藏

製本所　內田製本所

發兌　東京市牛込區横寺町四十三　聚英閣
振替東京四七八六九番
電話番町四六二番

不許複製

（合資會社電新堂印行）

宇野浩二先生著

小出畫伯裝幀挿畫

お伽新集

海の夢山の夢

菊半截三百八拾餘頁
定價金壹圓六拾五錢
送料八錢

本當に面白くて綺麗なお伽童話！

此の本は有名な小説家宇野浩二先生が今迄のお伽噺と違つた面白い趣向で今の少年少女誰が讀んでもわかるやうに極く面白く愉快なお噺しや、亦諸君が讀んでゐて、お噺しの中へ出て來る哀れな少年少女のために思はず涙を注がねはならぬやうな悲しいお噺を集めたのです。其上お噺に添へた小出畫伯の美しい色刷の挿畫と共に一度此の本を握つたら手ばなすことの出來ない程充分に諸君を喜ばせます。學校とか家庭とかの談話會には無くてはならない材料がうんとあります。此の本が今飛ぶやうに賣れてゐるのは無理ではありません。

一、龍介の天上
二、さとり御前
三、狼よりも虎よりも
四、鏡物がたり
五、海の夢山の夢
六、向ふの山
七、春の日の光
八、蕗の薹
九、父の大根畑
十、二疋の犬
十一、悲しい兄弟
十二、搖籃の唄の思ひ出
十三、片葉の蘆
十四、涙の泉
十五、悲しい歌
十六、先生のこゝろ
十七、誰か身の上
十八、晴れ渡る元日

アンナ・シーウエル女史著

全譯

ブラック・ビューティー（黑馬物語）

榎本泰二譯

菊半截二百七十頁　定價壹圓四拾錢
總クロース特製函入　送料八錢

哀れ悲しき黑馬物語！！諸君！！此を讀んで何うか哀れな動物に同情してやつて下さい。

倫敦から程遠からぬ或る靜かな牧場に育つた可愛い黑馬が遂に人手に買はれてから、今迄の平和な生活とは打つて變つた殘忍な取扱を受けて、烈しい鞭や手綱の下で重い馬車を曳かされる。右んだくれの馭者！　横柄で無慈悲な奥樣！　考へ無しの子供！　皮肉な運命等に依つて絶へず虐げられ、苦しめられる。其他亂暴な取扱で次第に惡性となつて、人を見れば噛み、蹴る可愛そうな短氣馬の話、僅かに軍馬としての昔の戰功を誇るみじめな老馬の話、其間にあつて、幾度か身を投げ出して主人の危機を救ふけなげなる働き、不幸、哀れ悲しい賃貸馬として倫敦の雜踏の中にあへぎ歩む等其の哀れな半生の物語は讀者をして思はず涙ぐましむ。著者は有名なる英國の女流作家にして動物心理を如實に描き出してゐる。讀者は感極まつて「どうか物の云へない動物に同情してやつて下さい」と叫ぶに至る程本當に哀れ悲しい物語りなのです。純眞な少年少女の讀物として此上ない立派な讀物です。

仁 3F
-58

文學士 澁谷春畦先生著 四六版二百十餘頁 定價壹圓五拾錢 總クロース函入美本 送料 拾錢

偉人の青年時代

天才か？ 教育か？

『世界的大科學者フランクリンも初めは一出版職工であり、佛蘭西文壇の巨匠エミイル・ゾラも嘗ては一書店の荷物發送夫に過ぎなかつた』

偉人と呼び賢人と稱せらるるの士も素より生れながらにして秀絶せるは少く、不撓不屈の努力は家庭に於ける訓育と相埃つて遂には青史に名を列するに至る。本書は泰西の著名なる政治家、文學者、科學者、宗教家、藝術家等二十五名士の青年時代の生活を詳說せるものにして如何に困苦に耐え、缺乏を忍び、而して其才幹を研磨鍛練せしかを說く、偉人の出現！此れ天才か？ 教育か？ 此の間の消息を傳えて遺憾なく、青年修養の一大寶典として敢て推奬す。

終